

石 すとーん・さーくる

No.102

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子)

2018年6月30日 発行

事務局 T945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941

ホームページ <http://niigata-sekibutu.voxx.jp>

石 仏 散 歩

飯山街道、敷石記念碑と名号碑

上越市 水 島 健 吾

旧新井市小出雲と飯山を結ぶ道は「飯山街道」または「富倉街道」と呼ばれた。古代から近世にかけて、飯山街道や北国街道など信越の山々を越える道は、「塩の道」として北信濃の人たちにとつては生活に直結する重要な道であった。江戸期、高田藩は長澤に、飯山藩は富倉に口留番所を設け、人や物資流通の取り締まりを行つた。

塩を中心に多くの物資が牛の背に乗つて尾根の粘土質の道を行くが、長雨や雪解け時、ぬかるんで難渋を極めた。安政四年（一八五七）、信州富倉村が周辺地域や街道利用者に、幅一尺五寸、長さ一間の敷石分を一口二朱で敷石奉加帳を回して寄付を募つた。寄付者は「その志を石碑に刻んで永久に留める」とし、十年の歳月をかけ、信越境から中谷を経て梨ノ木に至る約四kmに敷石が敷かれた。現在、

隣地域の人々、越後側では直海浜、上下浜、三ツ屋浜はじめ塩浜を持つ村々と牛方衆、今町の問屋や商人、高田小町の信州問屋、新井各村々と牛方、各寺院など広範囲にのぼり、信越合わせて約四〇〇弱の名を連ねている。

特筆すべきは、その中に飯山藩士十七名が敷石長さ二七七間分の寄付をしている事だ。江戸後期、高田藩は内実が苦しく、二、三男が分家に出る事は許可しなかつたが、飯山藩は二万石だったが、実収三万五千石ともいわれ、家臣の分家は認めていた。その為、高田藩の二、三男が養子に来る者が多く、必然的に高田藩士と飯山藩士での親戚関係も多くなつていった。冠婚葬祭、お見舞い、祭礼などで飯山街道の通行も多く、高田との縁のある藩士たちが率先して寄付したことが伺える。

この記念碑の国道を挟んだ向かい側に、同時期に作られた「往来安全 南无阿弥陀仏 富倉村中」の名号塔と「大日如来 越後国西濱一統 牛方中」の文字塔が集められ、地域の人々が守っている。



敷石記念碑と名号塔（下）



出会いのよろこび



上越市 川住清子

今期から友人と三人で入会しました。早く四月二十九日に行われた上越地区の見学会に参加しましたが、受付の時から穏やかな雰囲気で迎えてくださり、ほつといたしました。

見学会のしおりを受け取り、バスの中で見せてもらうと、心を込めて丁寧に作られた内容で実行委員の方々のご苦労に頭がさりました。

私は上越に居住しているながら、今まで北国街道を意識して移動することはなかったので、新しい発見にワクワクしました。

いろいろな石仏、石塔にふれる毎に、製作者はどんな気持ちで根気よく刻み続けたのだろう、そして、それが脈々と今に伝わっている事に大きな感動を覚えました。昔いつの時代でも手を合わせて念ずる事は人を救うのだと改めて思い起し、どれだけ人が念仏をとなえながら生きてきた事だろ……と改めて石仏を眺めると、温かい陽差しの中で、ただ静かに、ゆっくりと座していました。

その日一日、穏やかに心が洗われたのも、実行委員の方々の下準備と各所の説明がつたからこそです。一人では出合えなかつたことを教えていただきました。

見学会のしおりは時間を見つけて精読しています。
写真は思い出しながら眺めていきたいと思います。

合掌



福島古城本丸跡での記念撮影

北国街道謎解き膝栗毛

北国街道（Ⅲ）
2018実行委員会

四月二十九日（昭和の日）、上越地区見学会が四十二名の参加を得て行われました。街道シリーズ三回目となる今回は上越市稲田から同黒井までを謎解きしながら回りました。以下概略をご報告します。

▼清風院の賓頭盧尊者像（下稻田）廻国



聖木喰上人作の木像は大清水（柏崎市）大泉寺の木喰

仏五像の一つで、大正時代に当寺が譲り受けたもの。撫で仮のオビンズルさんとして親しまれてきた。その独特な微笑に魅了される。

▼黒田和泉守の墓（下稻田）街道沿いの

黒田家の庭に立つ墓塔は戦国時代の武将で守護代長尾晴景に反抗し滅ぼされた黒田秀忠の墓とされてきたが、今回の事前調査では黒田家の先祖が居住した黒田城跡（上越市字城山）に建てられた三人の城主の館跡

を示す碑と判断した。同所の筆塚は江戸時代末に寺子屋の師であつた子孫のもの。

▼**徳本・義賢名号塔**（大日）通称地蔵堂の傍らに江戸時代中期から末期にかけての念佛聖徳本と義賢独特の六字名号を並べて刻んだ石塔が建つてゐる。側面に四国八十八ヶ所とあるので四国靈場巡拝塔である。一基の塔に二人の行者の名号を刻んだものは珍しい。

▼**蟹池地蔵**（下門前）蟹池を開拓した江戸時代初期、池の底から出土したといわれ、爾来四百

年にわたり村人によつて安置されてきた。堂内のお地蔵様はお姿が見えないほど幾重にも着物、頭巾前掛けを被せられている。

▼**石垣の力士像**（春日新田）春日神社本殿の石垣

悪田村（現柏崎市悪田）の石工渡辺重一作



▼**馬市跡と馬頭観世音塔**（春日新田）当地で江戸時代中期宝暦の頃から昭和十八年まで馬市が開かれていた。東北地方の名馬が集まつて評判が高く最盛期には千二百頭以上も取引されたという。馬市に功績のあつた高浪忠大夫の墓と馬頭観世音塔が馬市の跡地の一角に立つてゐる。

▼**子持地蔵**（日ノ出町）昭和中頃までは田んぼの中の一本道であつたという旧街道沿いの道端にコンクリートの祠に地蔵菩薩と觀音菩薩が祀られており子持地蔵と呼ばれている。



が祀られており子供は両手でしつかりと宝珠を抱えている。夜泣きする赤子を負んぶして村はずれのお地蔵様にお参りする嫁子の姿が目に浮かぶようだ。

▼**義賢名号塔**（黒井）寺の入口に南無阿弥陀仏の名号塔が建つてゐる。もともと上荒浜と黒井の村境にあつたが道路拡張工事

直広の手による。石垣の左右に阿吽一対の力士像が嵌め込まれてゐる。作例の少ない彫刻であるが建物を災害から守る意味があると考えられる。



のため移されたもの。義賢は淨土宗の僧で、富士山で

修行し、念佛布教のため各地を遊行、信州から北陸への途中上越へ立ち寄つてゐる。当地では福島村（現上越市西福島）の大肝煎関根新左衛門と交流してゐる。（見学会のしおり付録「義賢行者と関根新左衛門」参照）

▼**帰路** 黒井宿での見学を終えて帰りは築城後わずか七年で廢城となつた幻の福島城址、太平洋戦争の戦時下に直江津捕虜収容所があつた跡地に造られた平和記念公園を見学して、直江津駅、高田公園でそれぞれ解散しました。

▼**反省会** 十日後まだ余韻の残る内にと実行委員で反省会を行いました。実施時期、集合場所の設定や、定員を大幅に上回る参加者を受け入れることによる見学時間の配分や、案内、解説の仕方、コース設定に無理が出て十分な対応ができなかつたことなど多くの反省点がでました。間もなくスタートする来年度実行委員会の課題にしたいと思います。（文責・やまだ漫歩）

事務局だより

◆平成30年度総会報告

5月20日（日）、アオーレ長岡第一協働ルームにおいて今年度総会が開催されました。以下、概要を報告します。

第一部（午後1時）は新潟県民具学会会長・五十嵐稔氏（当会会員）による「石仏と民具ーものに祈る・物で祈るー」と題する公開講演会で、32名（一般3名含む）の聴講でした。昭和40年代からの調査成果を交えながらの「祈りの民具論」で、今日では見ることのできない貴重な画像を披露いただきました。



第二部（午後14時40分）の総会（会員29名参加）では、①平成29年事業報告・会計報告、②役員改選案（広報担当役員として大槻和正氏が新任、渡辺景子氏が退任）、③新年度事業計画・予算案が事務局より示され、いずれも全会一致で承認されました。なお詳細は同封資料をご覧ください。



◆創立25周年記念「韓国石仏の旅」 ご案内

今年は当会創立25周年の節目の年です。

これを記念し、別紙①のとおり、初の海外見学会「韓国石仏の旅」を企画しました。隣国の石仏たちに会いに行きませんか。応募締切は7月30日。ぜひご参加下さい。

◆中越地区見学会（一泊）のお知らせ

今回は別紙②のとおり、県境・湯沢の石仏を一泊二日でじっくり訪ねます。大勢のご参加をお待ちします。

テーマ 三国街道の石仏を訪ねる

日 程 10月16・17日（火・水）
参 加 費 17,000円（宿泊費等込み）

◆『石仏ふおーらむ』13号原稿募集中！

現在、会誌『石仏ふおーらむ』第13号（B5版・平成30年秋発行予定）の原稿を募集しています。県内の石仏について調査成果や、短い報告も歓迎です。寄稿予定の方は左記へご連絡ください。新しい執筆陣を切望しております。（締切8月下旬）

*原稿は、1ページ1380字（400字詰め原稿用紙約3枚半相当）で、枚数は写真・図版も含めて最大15ページとしてください。

H-945-0042 新潟県柏崎市長浜町5-46
池田 孝博 電話090-3512-2863

◆新入会員（順不同）

田中邦子（出雲崎町）、佐野貞三（上越市）
増田喜代子（上越市）、川住清子（上越市）
中島初枝（上越市）、塚田隆一（上越市）
今野紗貴子（弘前市）、坂井厚子（横浜市）

◆日本石仏協会のHPがリニューアル

このほど日本石仏協会のホームページが一新され公開中です。同会に関心のある方は覗いてみてください。

◆会費納入のお願い

平成30年度会費未納の方に振替用紙を同封しました。早目に納入願います。

編集後記

五月十六日元上越地区代表秦繁治先生が満九十七歳で亡くなられました。平成二十一年の上越地区見学会の下見で実行委員と共に八十八歳のお年で上路（糸魚川市）の山姥の洞窟まで登られたことをなつかしく思い出します。ご冥福をお祈りします。